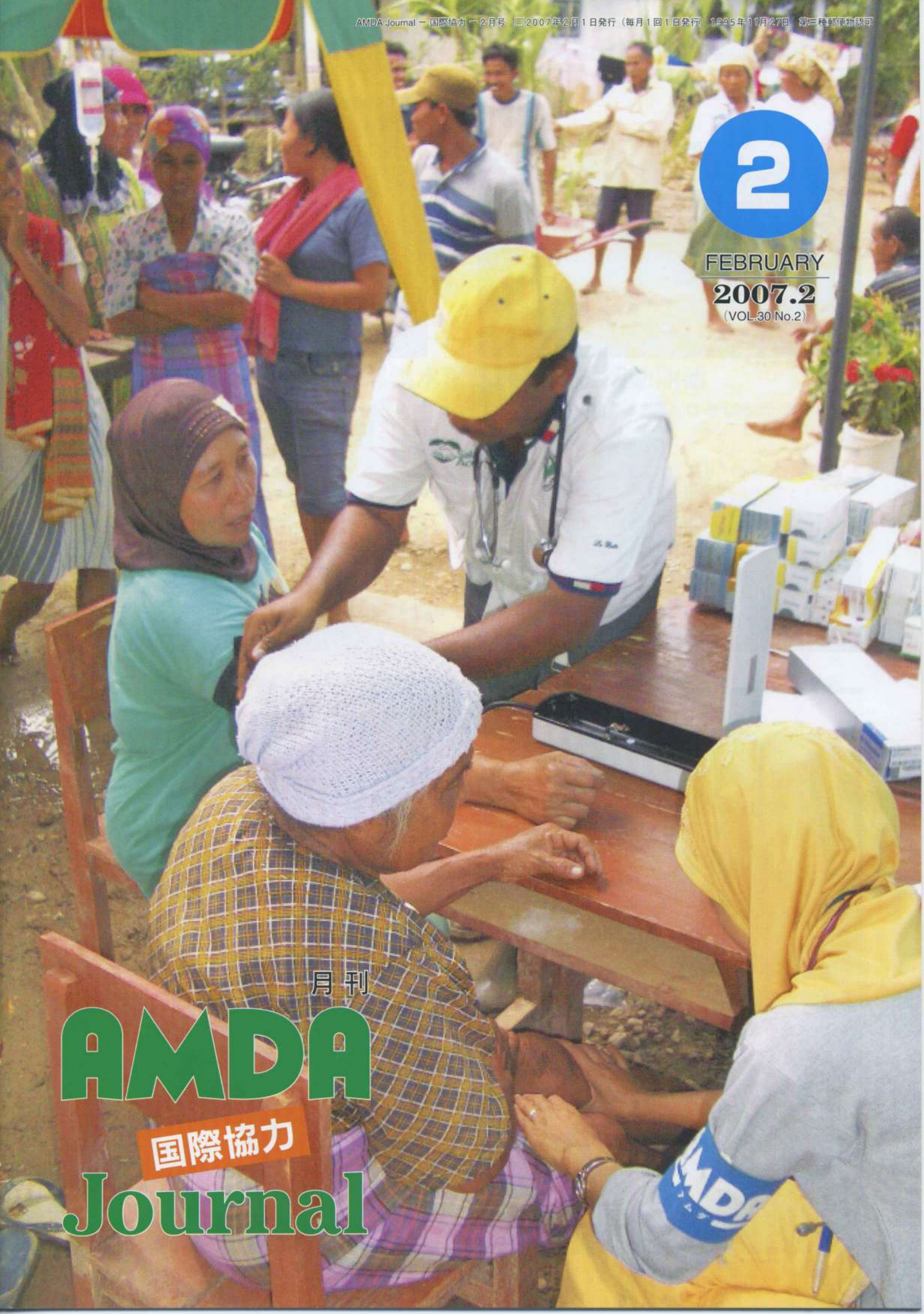
AMDA Journal ー 国際協力 ー 2月号 ■2007年2月1日発行（毎月1回1日発行） 1995年11月27日 第三種郵便物認可



2

FEBRUARY

2007.2

(VOL.30 No.2)

月刊

AMDA 国際協力 Journal

フィリピン台風21号緊急医療支援活動

スマトラ島北部洪水緊急医療支援活動

表紙の写真：スマトラ島北部洪水緊急医療支援活動での被災地巡回診療

AMDA Journal
国際協力
2007年2月号

CONTENTS

◇緊急救援活動
スマトラ島北部洪水 …… 1
フィリピン台風21号 …… 2
◇ボリビア会議報告 …… 4
◇ネパール看護師研修 …… 6
◇国内ボランティア活動紹介 …… 8
◇寄付者一覧 …… 10
◇AMDA高校生会 …… 14

※書き損じハガキ・未使用切手やハガキを集めています！

スマトラ島北部洪水緊急医療支援活動開始

－AMDA速報4（1月12日付）より

インドネシア・スマトラ島北部を襲った洪水で、約35万人が被災し、100人以上が死亡、数百人が依然行方不明と伝えられている（1／9国際移住機関（IOM）発表）。被災地からの報告によると、洪水で今期の農作物は収穫を全く望めず、備蓄してあった食糧と種苗は水に漬かったままになっている。復旧に向け、泥や瓦礫の撤去が始まったばかりであるという。

AMDAは、ザイナル・アビディン病院とAMDA緊急医療支援チームを結成し、支援活動を継続している。1月5日、ツゥラガ・ムクサ（Teulaga Meukusa）村のモスクで巡回診療を行ない、432人の患者を診察した。6日、ザイナル・アビディン病院の医師4人と看護師4人が交代要員として支援活動に加わった。活動の拠点となっているウマム・デラ・タミアン病院（Umum Daerah Tamiyang Hospital）を現在も継続して支援をしている。

7日、スンガイ・ユー（Sungai Iyu）の保健センターの支援を開始した。金山調整員はジャカルタに移動し、在インドネシア日本国大使館、日系各企業、報道各社を訪問し報告を行なった。

9日、豪雨の中、漁船でラントウ・パクプ（Ranthou Pakup）村へ移動し、巡回診療を実施した。支援が行き届いていなかったこともあり、村長はじめ村の人々から歓迎された。患者数は72人、ほとんどが成人で、上気道感染症、真菌性皮膚感染症、発疹、高血圧、下痢が主な疾患であった。

ザイナル・アビディン病院から参加している医師・看護師は、スマトラ島沖大地震・津波復興支援としてAMDAが実施した「麻酔科医師派遣支援」「看護師派遣研修」「行政担当者向けの医療機関緊急時対応研修（HOPE）」「外傷に対する初期治療の向上を図る研修プログラム（ATLS：Advanced Trauma Life Support）」を担当、または受講した経験を持つ者が多い。

【緊急医療支援活動開始日】
12月30日（インドネシア・スマトラ島北部で、12月21日から続く豪雨による洪水が発生し、被害が拡大）

【これまでの活動場所】
ウマム・デラ・タミアン病院（Umum Daerah Tamiyang Hospital）、ベンダハラ（Bendahara Sub-district）周辺の村々で巡回診療、ルブク・バティル（Lubuk Batil）村、トゥンプ・テンガ（Tumpuk Tenga）村、デサ・タンジュン（Desa Tanjung）村、スカ・ジャディ(Suka Jadi)村、スカ・ダマイ(Suka Damai)村、ツゥラガ・ムクサ（Teulaga Meukusa）村、スンガイ・ユー（Sungai Iyu）保健センター

【AMDAからの派遣者】
金山　夏子　調整員　AMDAアチェ事業統括
梶田　未央　調整員　AMDAアチェ事業派遣調整員
Nithian Veeravagu（ニティアン・ヴィーラバグ）
調整員　国際貢献大学校上席研究員（前AMDAスリランカ医療和平事業副統括）
Dr.Yose Waluyo　医師　AMDAインドネシア支部

【活動参加人数】　総計　25人

支部／所属	医師	看護師	調整員	計
AMDAバンダ・アチェ事務所			2	2
AMDAインドネシア支部	1			1
ザイナル・アビディン病院	11	9	1	21
国際貢献大学校			1	1
合計	12	9	4	25

【皆様からの募金を受け付けております】
郵便振替：口座番号01250-2-40709　口座名「AMDA」
＊通信欄に「スマトラ島北部洪水」とご記入下さい

【お問い合わせ】AMDA広報室
〒701-1202　岡山市楢津310-1
TEL086-284-7730　FAX 086-284-8959
E-mail: member@amda.or.jp　http://www.amda.or.jp

フィリピン台風21号　緊急医療支援活動報告

【活動概要】

期間：2006年12月1日から12月30日まで

活動場所：

フィリピン共和国アルバイ州

【被災状況】

2006年11月30日にフィリピン共和国、ルソン島南部を台風21号（台風ドリアン、現地名レミング）が横断した。同島南部アルバイ州では、マヨン火山周辺の火山灰が大雨により泥流となって麓の村々に流れ込み、大規模な被害となった。フィリピン共和国災害調整委員会（NDCC：National Disaster Coordinating Council）によると、12月16日までに、死者734人、負傷者2,360人、行方不明者762人、倒壊家屋は228,436軒に上った。また、ライフラインの破壊も深刻であり、アルバイ州では、災害発生から20日経ったが電気と水の供給は滞ったままであった。

この度の台風被害に鑑み、AMDA本部では、AMDAフィリピン支部長チュア医師と災害発生時フィリピン滞在中であったAMDAインドネシア支部長タンラ医師と協議を行い、緊急医療支援活動の開始とAMDA多国籍医師団（AMMM）の派遣を決定した。

【活動経過】 次頁表参照

【活動参加人数】

医師18人（フィリピン支部2人、インドネシア支部2人、ネパール支部2人、現地医師6人）　看護師18人（日本人1人、現地看護師17人）　調整員6人（本部職員1人、フィリピン・アシジの聖フランシスコ・デフ・センターからの調整員1人、フィリピン金光教平和活動センター1人他）　計44人

【活動結果】

被災者の避難所としては、地元の小学校が使用されるケースが多く見られ、被災者は1教室に37人から50人が生活するという過酷な生活を強いられていた。アルバイ州知事の許可を受け、12月5日フィリピン医師会と協働する形でレガシピ市近郊のカムリン（Camalig）にて巡回診療を開始した。診療に訪れる被災者の中には、傷の処置に加えて、感冒や気管支炎、肺炎等の急性呼吸器感染症をうったえる患者が多く見受けられた。その後15箇所で巡回診療を行い、インフラの復旧と医療サービスの回復を確認したことにより、12月21日の診療をもって医療活動を終えた。今回の緊急救援は、被災者が多く、AMDAの巡回診療箇所を訪れた1日あたりの患者は、少ないときでも160人、多いときには800人を超えた。5日から21日までの15日間（巡回診療を行った日数）の患者総数は5,558人であった。

日本からの派遣者（計4人　以下派遣順）：

派遣期間	氏　　名	専門・所属	居住地
12月2日～12月23日	館野　和之	AMDA職員・調整員	岡山県岡山市在住
12月2日～12月3日	近持　雄一郎	AMDA調整員	岡山県岡山市在住
12月7日～12月23日	渡邉　美英	AMDA登録看護師	長野県長野市在住
12月12日～12月30日	ニティアン・ヴィラーバグ	AMDA職員・調整員	スイス在住

【活動経過】

12月2日（土）	本部緊急救援担当、館野和之、午後1時にマニラ到着。AMDAフィリピン支部長Dr. Chua、AMDAインドネシア支部長Dr. Tanra、フィリピン·アシジの聖フランシスコ·デフ·センターのMr. Lotrenzo（専門：建築）、AMDA近持と打ち合わせ
12月3日（日）	第一次AMDA派遣チームは、ビラモア空軍基地から空軍カーゴに同乗して、レガスピに向かう。アルバイ州ダラガ村に入り、同州医師会との調整
12月5日（火）	フィリピン医師会の協力の下、アルバイ州知事の許可を得て、アルバイ州カムリン（Camling）村にて巡回診療開始
12月6日（水）	Ibalon Elementary Schoolで巡回診療
12月7日（木）	アルバイ州ブユアン（Buyuan）村Buyuan Elementary Schoolで巡回診療
12月8日（金）	渡邉看護師、着任 アルバイ州セントドミンゴ役場で巡回診療
12月9日（土）	Daraga町の6つの避難所を視察。 ＜避難所と被災者数＞ Binitayan Elementary School 4396　Taraga Elementary School 3036 Malabog Elementary School 1230　Busay Elementary School 2241 Banag Elementary School 948　Tabon － Tabon Elementary School － 1126
12月11日（月）	Binitayan Elementary Schoolにて巡回診療 インドネシア支部より2人の医師が着任 ニティアン調整員、午後現地入り
12月12日（火）	Taraga Elementary Schoolにて、巡回診療
12月13日（水）	Bacacay地区の公民館にて巡回診療
12月14日（木）	Guinobatan地区にて巡回診療
12月15日(金)	Daraga地区、Tula Tulaの避難所にて巡回診療
12月17日（日）	ネパール支部より2人の医師が着任 午前中はTabaco Cityのセントアントニオ小学校で、午後はTiwiの地域の体育館にて巡回診療を行う。
12月18日（月）	Ligao市ヘレラ小学校にて診療活動
12月19日（火）	アルバイ州、Legaspi市、クルサダ（Cruzada）地区で診療活動
12月20日(水)	Malinao地区にて巡回診療
12月21日（木）	Camalig地区、Comon Elementary School 現地インフラ（水、電気）が一部復旧し、病院の機能の回復を確認。支援中止を決定。 アルバイ州医師会に医薬品の寄贈を実施。同州知事から感謝状を授与
12月22日（金）	マニラにおいてフィリピン医師会長と面会。活動報告 派遣者全員による総括会議
12月23日（土）	館野調整員、渡邉看護師離任、帰国
12月24日（日）	ニティアン調整員、被災地調査のためマニラからレガスピ被災地に移動

AMDA会議南米大陸初上陸
AMDAアメリカ地区会議（於ボリビア）報告

AMDAインターナショナル　大林　純子

AMDAアメリカ地区コンファレンス第一日目

↑　AMDAアメリカ地区会議　第２日目ビジネスミーティング　↓

2006年11月25～26日、1984年から続いてきたAMDAインターナショナルの会議が、初めて太平洋を渡り「AMDAアメリカ地区」会議として南米ボリビアの地で開催されました。開催地となったサンタクルス市は急発展を遂げつつあるボリビア第二の都市であり、ホストを務めるAMDAボリビア支部も所在しています。この会議には、ボリビア支部の周到かつ暖かいアレンジを受けて、海外からは菅波代表を筆頭とする本部日本と、ペルー、ホンジュラス、カナダ各支部とブラジルからのゲストが参集しました。

AMDA国際会議の通例どおり、一日目は緊急医療活動及びコミュニティ開発活動に従事するAMDAの人道援助をテーマとしたコンファレンスが行われ、サンタクルス市庁をはじめとする地元代表やボリビア支部の活動を支える当地の医師等大勢が参加して熱気のこもった発表と意見交換が行われました。AMDAボリビア支部の主要構成メンバーが運営するフォイアニニ病院は、当地の優良な医療施設として名高いのですが、AMDAボリビア支部として当国の医療技術向上に長年寄与してきた非営利活動をより広く知ってもらう機会にもなりました。また、地元当局からは、参考になる事例として中南米におけるAMDA各支部の活動について特に強い関心を寄せられ、質疑応答が盛んに行われました。一日目夜の夕食会には、在サンタクルス日本国駐在代表方をお招きし、当地の民族舞踊と食事にもてなされつつ関係者間の交流が深められました。

翌二日目は、AMDA Internationalアメリカ地区支部会議（北中南アメリカ）として、AMDA支部間のビジネスミーティングを行いました。ここでもテーマの中心はAMDAの活動の二本柱である1）災害時緊急医療救援、2）社会開発プロジェクトですが、ビジネスミーティングでは、これらの活動を推進していくにあたって必要となる、より具体的実践的な討議や検討が行われました。実際、このような重要テーマについて討論するのに限られた時間では足りるはずもなく、予定された時間を延長しつくしてぎりぎりまで会議は続けられました。インターネットの時代は我々に多くのことを可能にしてくれましたし、そのおかげで我

々の住む日本とちょうど地球の反対側にあるボリビアの人々と様々な活動をともに展開し、常にメールでやり取りをすることもできるわけですが、それでもなお、こうして一つのテーブルを囲んでお互いの目を見ながら討議するということには換えがたい意味があることを参加者一同が実感していました。

こうして2日間にわたるAMDAアメリカ地区会議で、災害時緊急医療支援と貧困克服をめざす長期的社会開発プロジェクトに関して、熱意ある意見交換がなされたわけですが、これらの議題はAMDAの根源テーマである「幸福を侵害する三要素ー貧困、自然災害、戦争」とAMDAが如何に取組んできたか、また今後取組んでいこうとしているか、という核にあたるものでした。2日間はあまりに短い時間でしたが、超多忙な日々を送る各支部参加者にとってこの時間を捻出するのは実は容易ではありません。だからこそ、この凝縮された時間の中でなされた幾多の意見交換、報告、情報交換、そして確認されたお互いの信頼や友情が、緊急救援という逡巡の余裕も許されないときに差し延べあえる助けの手となり、長期的社会開発活動の場を支えてくれる耐久力になることを、我々も信じたいと思うのです。各支部からの参加者は、4000メートルのアンデスの山々を越えて、ボリビアに到達し、また山々を越えて帰りました。その長い道のりをかけるに価する誠意ある熱い南米ボリビアでの会議であったことをご報告いたします。

沖縄タイムス　2006.12.24

団結と自立心で運営

ホンジュラスから広がり

AMDA活動報告

救える命があればどこへでも

□23□

菅波　茂

コミュニティー薬局

第一回AMDAアメリカ地域会議を十一月二十五日から二日間、ボリビア第二の都市であるサンタクルス市で開いた。日本、ボリビア、カナダ、ペルー、ホンジュラス、そしてブラジルからの参加者で、緊急救援体制の強化や貧困対策プログラムを話し合った。

前日にサンタクルス郊外にあるコロニアオキナワを訪問した。ボリビア沖縄県人会の比嘉次雄会長に案内していただいた。苦労は多々あったが、自営農家としての戦後の移民は、戦前の雇用者としての移民よりもより良い環境だったという。

文化会館、資料館、学校、診療所そして慰霊碑とコミュニティーの中核施設が完備していた。現地の人との結婚も増えており、沖縄移民の幸せだけでなく、コミュニティー全体の幸せを推進する時期がきていると認識されていた。

サンタクルスに来る前にペルーの首都リマ市で日系移民の方々にお会いした。成功された方々で勢いがあった。評判の良い「日秘診療所」に加えて、移民百周年を記念して建設された総合病院「百周年協立病院」を開設されたばかりだった。

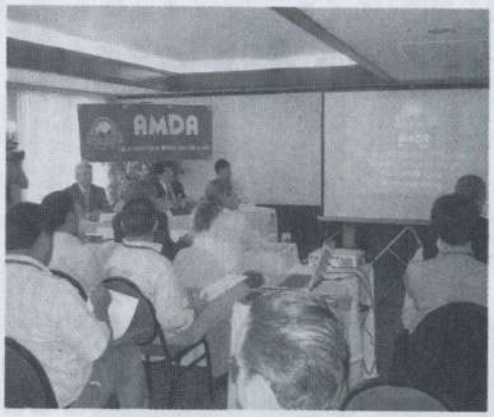
近郊にある国際協力事業団（JICA）支援の医療センターも訪れた。

途中、三十万人が住むスラム地域を通過した。草木一本ない乾燥した砂が舞う山肌に、マッチ箱のような家が密集していた。電気はつくが水がない。時の政権から見放された地区である。リマ市と比べると、まさに天国と地獄である。今、中南米で貧困層が支援する左翼政権が勢力を増している現実が良く理解できた。

第一回AMDAアメリカ地域会議では、AMDAホンジュラス支部によるコミュニティー薬局の成功事例が地元行政当局からも注目された。貧しいから薬を無料で提供する従来の慈善事業ではない。コミュニティーの人たちが小さな薬局を運営する意欲と能力形成が中心である。初期資本を回転させることも評価の対象である。

コミュニティーの団結と自立心なくしては不可能である。相互扶助あるいはユイマールの精神を支援するプログラムである。来年からサンタクルスで試行予定である。AMDAホンジュラス支部が教科書作りと研修生受け入れを担当する。

中核施設の完備しているコロニアオキナワが、ボリビアにおけるコミュニティー薬局プログラム推進センターの役割を担っていただければ、これに勝る喜びはない。



緊急救援体制の強化や貧困対策プログラムを協議した第1回AMDAアメリカ地域会議＝11月、ボリビア・サンタクルス市

ブラジルからわざわざ参加していただいた民間大使の赤嶺尚由夫妻がAMDAブラジル支部設立に尽力してくださることになった。「サンパウロからは東北ブラジルよりサンタクルスの方が近いよ。近所に来ている感覚だよ」。ありがたい限りである。「移民も本国に頼る時期から、自ら独立して物事を考えて実施する時期が来ている」と断言された。

「日系人だけのことを考えるのはもう時代遅れだ。もっと民族を超え、全体的に考えないと優秀な人たちの協力も得られないし、良い仕事もできないよ」と助言をいただいた。事実、ブラジルではイタリア系やドイツ系が多数派である。AMDAボリビア支部長のフォイアニニ家は副大統領を出したイタリア系の名門である。副支部長はスペイン系である。

同会議は私にとって中南米におけるAMDAの活動を再考する非常に良い機会となった。「百聞は一見に如かず」は、本当に名言だった。それでも沖縄にこだわりたい私の気持ちを理解していただければ幸いである。

最後に、二年間にわたる連載の機会をくださった沖縄タイムス社に、心からお礼を申し上げたい。

AMDA（特定非営利活動法人アムダ）理事長

（おわり）

ネパール子ども病院医療人材育成

ネパール子ども病院の新生児集中治療室（NICU）に勤務するガウチャン看護師がAMDA兵庫の推薦により兵庫県が主催する途上国の人材を対象とした技術研修制度に昨年7月から今年2月まで参加しています。以下にこの研修の様子、ガウチャン看護師が学んだことなどについてのAMDA兵庫の桂木聡子さんからの報告をお届けします。

NICU看護師のガウチャンさんはネパール南部のネパール子ども病院から、昨年7月3日に平成18年度の兵庫県海外技術研修員の一人として、日本に来ました。

彼女にとって初めての日本です。到着ロビーで彼女はとても緊張していました。一緒に研修を受ける他のメンバーとも初めて顔を合わせました。中国3名、ブラジル2名、コスタリカ1名、ロシア1名、ケニア1名、ラオス1名、それとネパールの1名を入れて計10名が今回のメンバーです。

兵庫県海外技術研修員受け入れ制度は、1971年から国際協力事業の一環として行われており、外務省の補助がなくなってからも「ひょうご海外技術研修員制度」として形を少し変えて続けられてきました。

今現在、ネパール子ども病院の小児外科で目覚ましい活躍をされているマノーズ医師も以前この制度を使って日本で学びました。

毎年、10人の募集に200～250人の応募があります。応募資格や研修先の確保の有無、推薦団体などについて様々な審査を受けて、10名の研修員が決まります。

研修員は全員JICA兵庫センターに住み、一ヶ月の工夫に工夫が重ねられたハードな日本語研修の後、8月1日からは、それぞれの研修先に赴きました。それぞれの国の言語が通じる研修先はほとんどありません。医師、看護師、造園家、教育者、通信専門家、博物館員等である彼らが様々な研修先でまずぶつかるのは、授業では習わない、主語や目的語のない日本語です。

ガウチャンさんも例外ではありませんでした。

スタッフの英語力やガウチャンさんの日本語力では、コミュニケーションの問題によってより多くの知識を得たいと思っても、思ったようにはいきません。また、時間があるときにはまだしも、稼働している病院という忙しすぎる研修先では、なかなかスタッフの方の手を止めて、聞くこともはばかられるので、毎日気を遣い、観察することにより、知識を得ようと努力していました。

彼女は日本の医療について、非常に高度で、ネパールよりも100年進んだシステムを持っており、患者は病院で、彼らの家族から受けるよりもはるかに手厚い介護を受けられていると思うと言います。

そして今、彼女は、この研修で学んだ多くの看護や医療機器に関する知識をネパールに持ち帰り、NICUの管理運営を少し変えたいと考えています。

ネパール子ども病院はどんどん地域にとけ込んだ中核病院になりつつあります。彼女はネパール子ども病院には病棟や医療機器や人手不足の問題はあるけれど、スタッフが日本の医療に見られるように、医療人としての良心にのっとって日々の向上に励めば、その将来は明るいと言います。

見るもの聞くことがすべて初めてで、コミュニケーションにも悩んだこの研修もあと1ヶ月足らずとなり、病院内の研修だけではなく、ネパールとは違う日本の文化や生活習慣・考え方に触れ、本当に多くのことを学ぶことができたので、今度はそれをどのようにネパール子ども病院全体(NICUだけでなく)に還元するかを考えたいと話してくれました。そして、できれば、来年も他の人がこの研修にチャレンジしてほしいそうです。

AMDAの活動は、有形無形の多くのご支援で支えられています。
今回は、国内ボランティアの方々の活動の一部をご紹介いたします。これから一層、様々な分野の方の特技や経験を活かしたボランティア活動の場が提供できればと願っております。
どうぞお気軽にお問い合わせください。

AMDA神女クラブ誕生

AMDA神戸女子大学クラブ代表　山形　友美恵

私たちAMDA神戸女子大学クラブ(AMDA神女クラブ)が産声を上げたのは昨年の7月で、10月1日を結成日として正式にAMDA本部に届を申請し、成立の運びとなりました。

メンバー全員が国際教養学科ということもあり、みんな国際関係や国際貢献に興味・関心を持っています。7月に結成にむけて集まりましたが、AMDAの活動についてもっと知ろうと思い、9月23日に岡山市で開催された岡山県立大学とAMDA主催の公開講座「災害セミナー」に参加し、またAMDA本部の成澤さんにもお時間をいただいて、AMDAの活動やご自身のAMDAとの係わり合いなど貴重なお話を伺い、とても有意義で楽しいひとときを過ごさせていただきました。

AMDAとして活動している学生や団体は数多くあると思いますが、その中でも大学でのクラブ結成は私たちが初めてとのこと。今年から始動したので、まだまだ経験や知識が浅いですが、これまでの大きな活動として挙げられるのが、大学祭でのフリーマーケットと募金活動です。そこで寄付されたお金は、活動に役立ててもらおうとAMDA本部へ送りました。現在は、冬休み中の活動として、年末年始という事で年賀状の書き損じ葉書や切手を学内で集めることにしています。また例年2月に大阪で開催されている「One-World Festival」にもボランティアとしてお手伝いできたらと考えています。

このクラブのメンバー全員が所属している神戸国際教養学科は今年の4月に新設されました。そのため、お手本となる先輩がいないので、すべて自分たちが先頭に立って切り開いていかなければなりません。

なんでも「初めてづくし」で、大変なことも多々ありますが、将来の後輩たちの良いお手本となるような先輩になれるよう努力していきたいし、AMDAでの活動もフロンティア・スピリットで頑張っていきたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

鎌倉市社会福祉大会で感謝状を授与される

AMDA鎌倉クラブ

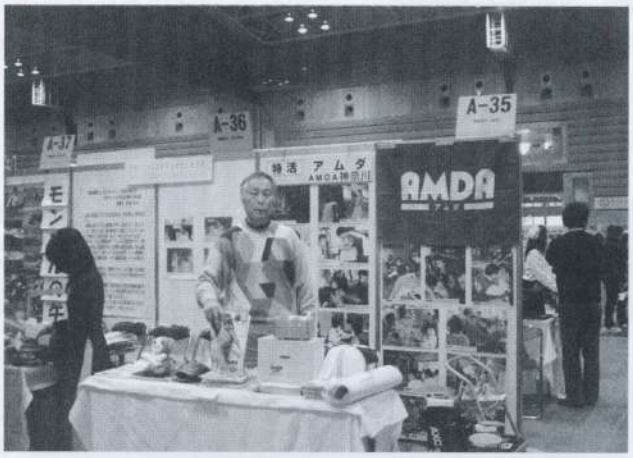
去る平成18年11月1日（水）、鎌倉生涯学習センターホールにおいて鎌倉市社会福祉大会が開催され、その席上で、一般表彰として感謝状をいただきました。

AMDA鎌倉クラブは、AMDAの活動を支援するために、毎年チャリティーコンサートやバザーその他のイベントを行なって得られた収益金をAMDA本部に寄付してきました。しかし、これらの活動の足場である鎌倉市の社会福祉のためにも、なにがしかの寄付をすべきであり、また、そうすることが鎌倉市民のAMDAに対する理解につながるであろうとの観点から、平成14年度のチャリティーコンサートの時以来、収益金の一部を鎌倉市社会福祉協議会の福祉活動振興基金に寄付をしてきました。

そしてこの度、地域社会福祉活動に貢献した個人や団体とともに、AMDA鎌倉クラブも一般表彰として感謝状をいただいた次第です。

横浜国際フェスタ2006

AMDA神奈川支部副代表　松本　哲雄



2006年11月18日（土）～19日（日）、横浜市みなとみらい（JR桜木町駅、横浜市営地下鉄みなとみらい駅下車）にあるパシフィコ横浜の展示ホールにおいて横浜国際フェスタが開催されました。一昨年まで山下町の産業貿易センターで『横浜国際協力まつり』として開催されて来ましたが、昨年からこの地に移り、同時に名称も変わりました。

40m×80mの会場を横浜国際フェスタ、だがしや楽校、フェスタ・アレグリア・ブラジルで共用。国際フェスタは7団体（フェスタネットよこはま、横浜NGO連絡会、横浜市国際交流協会、JICA横浜、横浜市、パシフィコ横浜、横浜青年会議所）で組織委員会を構成。ジャンル別分類では、国際フェスタの参加団体総数は105でした。AMDA神奈川支部では昨年、①会場費が高額になり、参加費が値上げされた。②場内で使用する台車のやり繰りが付かない。③ガレージセールの品物不足、等の理由で参加を見合わせた経緯がありました。今年度の神奈川支部総会では、台車が無料で使用出来る。ガレージセールを実施しないと持ち出しになるが、AMDA本部・神奈川支部の活動を広く知ってもらう良い機会になる、と言う前提で参加の方向で検討することになりました。しかし当日の会場には使用出来る台車はなく、組織委員会から一時借用。2日目は自動車整備用の手製『寝板』を持参しました。昨年の最終打ち合わせでは“宅急便で台車を持ち込むことが可能になった”だけで、既に不参加を決定していた私達には、今回その詳細が正確に伝わらなかったことが、誤解の原因になったようです。今回ガレージセール用の品物を広く呼びかけて集めることはしませんでしたが、個々に集めた物と前回からの繰越の小物（カメラ・ワインの栓抜き・ポロシャツ・折りたたみ傘・等）を販売。参加費の6,500円を越える収入を得ることが出来ました。さらにAMDA本部から頂いたバックナンバーのAMDAジャーナルやダイジェスト版を入場者に配布。栃木県の女性は「私は看護師。活動したいが近県にAMDA支部がなく、手近に相談する場所がない」、そこで私は『登録手続き。トルコ大地震やネパールの病院で活動した看護師の体験』を説明、本部にメールすることを勧めました。また男性薬剤師からも同様の相談がありました。昨年の入場者は横浜国際フェスタだけで1万5千名でしたが、今回は3団体の併催により2万5千名と予測。しかし1日目だけで既に1万5千名。2日目が4万名。初日は好天でしたが、2日目は雨になり、屋根つきホールは絶好のレクリエーション会場になりました。

第2の人生のスタート

AMDAボランティア　村野　陽治

1991年（平成3年）1月、旧郵政省郵便貯金に「国際ボランティア貯金」の制度が創設され、同年9月第1回目の寄付金が「AMDA」のネパール医療活動等に700万円配分されました。

その配分伝達式のお世話を、当時自分が局長をしていた備前一宮郵便局でさせて頂いたのが、AMDAとの関わりの始まりです。

昨年3月、永年勤務した郵便局を退職し、しばらくはあこがれの毎日が日曜日の生活を楽しんでいましたが、何時までものんびり、ダラダラとして過ごすわけにも行かず、5月にAMDAの門を叩きました。

幸いにも、AMDAの皆さんに気持ちよく受け入れてもらえ、今では楽しく働かせて頂いております。

自分が勤務していた特定郵便局の局長の役割の一つとして「地域社会への貢献」という役割があります。例えば、PTA活動や公民館活動に参加するとか、バレーボールやグラン

ドゴルフの大会を主催するなど、いろいろな地域のイベントに参加してお客様とのふれあいを大切にすることです。

自分も、現役の時は地域興しの「びぜん一宮フェスティバル（ももまつり）」に企画委員として参画したり、敬老会のグランドゴルフ、ママさんバレーボール大会を主催、愛育委員会の講演会などにも参加していました。

AMDAの活動には、「国際ボランティア貯金」がスタートした時から関心があり、1995年1月の「阪神・淡路大震災」緊急救援活動の際に後方支援を郵便局職員が手伝ったり、5月のロシア、サハリンの大震災の際にも、岡山空港倉庫での荷物の積み込みの整理などに近隣の郵便局職員と一緒に手伝ったりとAMDAの仕事は以前から見たり、少しですが触ったりしていました。

とりわけ、岡山空港から10トンの救援物資を満載した大型のチャーター機が夕闇の中へ飛び立った時には、参加者から大きな拍手が涌上がりました。感激のシーンです。

又、同年秋には、旧ユーゴスラビアにタオルを贈る運動を展開し、各方面から集めたタオル3000本をAMDAを通じて現地に届けて頂きました。

AMDAは、1984年に設立以来今年で23年になります。その間に岡山に本部を構え、世界29カ国に支部を置き、自然災害や内戦などで苦しむ人々のために「救える命があれば何処へでも」の精神で活動を続け、多くの人々の「明日への生きる力」を与えてきました。

そんな崇高な精神のAMDAで、第2の人生のスタートを始めることが出来ることを心から感謝し、喜びを感じております。

菅波代表から「AMDA設立25周年記念資料室」の準備室長という大変な役割をいただきました。幸い旧来の友人の長門浩さん（元宮内庁郵便局長）と石黒静子さん（元労働省婦人少年室長）というメンバーを得て、少しでもお役に立てる仕事が出来ればと思っております。

皆さまのご支援をお願いします。

写真データベースシステムの構築

岡山科学技術専門学校・情報システム学科2年　藤井　裕也

今回私は、自分が勉強していることを微力ながら、社会のために活用できる機会を与えていただきました。すなわち、AMDAの方々が、活動中に撮影された写真のデータベース化です。これにより、目的の写真が用意に取り出せるようになり、資料作成への利用や、講演会での利用等が容易に出来るようになると思います。

私は岡山市内の専門学校にて2年間、データベースシステム構築やネットワークの構築について勉強をしてまいりましたが、このような形で役立てることを嬉しく思っています。私が今回このボランティアを引き受けたのは、その内容が自分にとって非常にチャレンジングであることと、分かりやすい形で自分の社会への貢献が実感できることです。

自分にとってもチャレンジングである事柄をボランティアとして行うことが出来るのは、ボランティアを始める際の自分への言い訳・きっかけ作りになりました。初めから「誰かのために」というのは、自分に嘘をついているような、照れくさいような気持ちがします。しかし、「自分のために」学校の勉強の延長として、「今までの自分の学習してきたことの集大成となるようなシステムを構築してみる」と考えると自然に今回の機会を受け入れる気になりました。また、実際に私自身一つの成果物を完遂するという経験により成長できると思っています。

また、もう一つの大きな動機として、今回の写真用データベースシステムの構築はどのようにシステムが活用されるのかが事前に明確に把握できたことにより、やりがいを感じたことです。今回私が構築するシステムに保存された写真は、AMDAの会員あるいは協力者・関係者向けの情報提供等に利用されると思います。自分の経験からも、どんなに良い話も文字で読むだけでは正確に状況をイメージすることが出来ないところを、写真が一枚あるだけで足りない情報の多くが補われると思うことがよくあります。ましてや外国での出来事であれば、映像のインパクトは大きいのではないかと思います。自意識過剰とは思いますが、自分が写真の管理を手助けすることで、ボランティアに興味を持つ人が一人でも増えたら良いなと思います。

高校生の君たちへ再び

ー岡山県立総社南高校２年生のみなさんからの質問に答えてー

前回、AMDAジャーナル12月号でお約束した、私からの回答です。

■エイズは人から感染するって言うけど最初にエイズになった人はどうして何が原因でなったのか。

■世界で最初にいつどこでエイズがみつかったのですか。

ーわかったのは、アメリカ合衆国で、1981年のことです。男性の同性愛者の間で奇妙な病気が流行っていることが問題になりました。その後、輸血での感染例がわかり、男性同性愛者だけの病気ではないことがわかりました。翌年の1982年になって、AIDS（Acquired Immune Deficiency Syndrome：後天性免疫不全症候群）と命名されました。HIV (Human Immuno-deficiency Virus) ウィルスが発見されたのは、1983年のことです。しかし、実際のHIVの起源はもっと古く、20世紀の初め、アフリカでチンパンジーに感染するサル免疫不全ウィルス（SIV）が、その血液などに触れた人間に感染するように変異して世界中に広まっていったものと考えられています。カメルーンのチンパンジーから人間に感染したウィルスが現在世界的に流行しているHIVウィルスであるとする研究が2006年の5月に発表されています。

■どうしてエイズはこの世からなくならないのか/エイズの完全消滅は可能ですか。

ー可能だと思いたいですね。みなさんは天然痘という感染症が多くの人の努力で撲滅されたのをご存知でしょう？ポリオ（小児麻痺）という感染症ももう少しと言われています。エイズもそうなる可能性はあると思います。

■エイズによって人類が滅びる可能性はありますか。

ーウィルスは、何かに寄生しなければ生きられないので、人間が滅んでしまうと自分も滅んでしまいます。その前に、人間と共存するようにウィルスが変化していくのではないか、という説もあります。どう思われますか？私は、例えウィルスの方で変化しなくても、人類が対策を取ることによって、少なくとも共存していけると信じています。

■日常生活でエイズは感染するのですか？

■性行為がなくてもエイズは感染するのですか？具体的に教えて下さい。

ーHIVは、性行為、血液を介した感染、母子感染、の３つで感染します。ですから、性行為を除くと、血液感染、母子感染ですね。どうでしょうか？みなさん、日常生活で感染する可能性がありそうに感じますか？実は、日常生活で感染する恐れはとても低いと言われています。出血をして血液が付着しやすいカミソリや歯ブラシを共有しない、などが推奨されています。普通あまり歯ブラシを共有したりしないと思いますが…。これは、どちらにとっても言えることで、自分が感染者であれば他人を感染させないように、そして感染者に対してであれば、免疫の落ちている感染者に自分の持っている菌などを感染させないようにという配慮にもつながるものです。

■エイズは治る病気なのか？/「エイズ」を治せる日がくるんですか？

ー残念ながら、今の段階で、エイズは治らない病気です。ただ、治療を受けられる環境にある人にとっては、発症したら死んでしまう病気ではなくなりつつあります。そしていつかエイズを治せる日が来ると思います。感染しないように予め投与する、ワクチンがもしかしたら先にできるかもしれません。

■エイズに対抗する薬・手段はないのか。

ー薬はあります。完全に治すことはできませんが、良い治療方法が発見されています。しかし、完全に治す＝ウィルスをなくすことができないため、一生薬を飲み続ける必要があります。それは、患者さんにとっても、とても大変なことです。ですから予防がとても重要なのです。

■エイズの治療法はどんなものがあるのか。現在の治療でエイズはどこまで回復できるのか？

ー現在では、異なる３種類以上の薬を飲むカクテル療法という治療が一般的です。決められた時刻に遅れず、忘れずに飲まなくてはなりません。一度でも飲み忘れると、ウィルスが変異して、薬が効かなくなってしまう可能性が高いからです。そして、今のところ、一生飲み続けなくてはならないとされています。人によっては副作用もあり、大変です。ただ、薬の投与により、いったん免疫の低下した患者さんも、元気に働けるまでに回復する例も多くなっています。

■ＨＩＶ感染してからどのくらいでAIDSになるんですか。/具体的にエイズとはどんな症状を引き起こすのか。

■HIVは潜伏期間があり、エイズになると知っているが、実際感染した人はどのような一生を送り、亡くなってゆくのか…気になる。

ー共感を寄せてくれてありがとう。感染者は、HIVウィルスによって少しずつ免疫の機能が破壊されていき、多くの場合数年から十年程度でエイズを発症します。今はCD4という免疫の値を定期的に検査して、その数値が低くなってきた時点で治療を開始するというのが一般的になってきています。治療を始めると、いったん下がった免疫の機能がまた上がるようになりました。今の時点では一生薬を飲み続ける必要がありますが、きちんと薬を飲めば必ずしも亡くなる病気ではなくなってきました。患者の方がお年寄りになって、エイズではなく、別の病気で亡くなる方が増えてきたということです。ただ、感染に気が付かないでエイズを発症して、免疫の状態がすっかり低下してしまってから病院にかかった場合、やはり治療はとても難しくなります。日本の場合、エイズを発症するとは、現在定められている23の日和見感染症のうちひとつでも発症することを言います。日和見感染症とは、健康なときには症状が出ないのに、免疫機能が低下したときに発症する感染症のことで、結核や帯状疱疹、HIV脳症などが指定されています。どの感染症を発症するかで、それぞれ最期はずいぶん違うと聞いています。

■岡山県のエイズ患者感染者は全国では多い方なのかなあと気になりました。

ー11月1日に発表されたばかりのデータがあります。HIV感染者が全国27番目、エイズになって分かった人は全国で24番目、ちょうど真ん中ということになります。今数えてみて自分で、えっ！と思いました。もう少し下だと思っていたのですが、違いましたね。そして、講演の中で言ったように、この数字は、岡山県にある保健所や病院で検査をして分かった感染者・患者の数です。他県で感染した（検査した）岡山県出身者は含まれていません。

関心のある方は3ヶ月ごとに発表されますから、ご覧になってみてください。
エイズ予防情報ネット
http://api-net.jfap.or.jp/
「世界・日本の状況」から「日本の状況＝エイズ動向委員会報告」

■エイズに感染した、すべての人々の体からエイズを消しさる方法を教授してください。
ー本当に、その方法が見つかったらいいのですが…。

■エイズの予防にはどのようなことをすれば一番いいですか？
ーそうですね、私には、エイズはウィルスですが、とても人と人との関わり方を試すもののように感じられるときがあります。私とパートナーの関係、私と感染者の関係、私と良心の関係など…。エイズについての正確な知識とともに、自分の意思をパートナーにきちんと伝えられるか、伝えているか、一度考えてみてはどうでしょうか。

■予防方法はどのようなことを教えているのですか？学校で教わるようなことか、もっと専門的なことなのか…？
ーみなさんが学校で教わっている内容を細かくは知らないのですが、専門的なことというよりも、上記のような、人との関係、自分の将来について考える、などに、時間をかけて取り組んでいます。

■最後に見せてもらったかけ軸に何が書いてあったのか英語だから分からなかったので、意味が知りたいです。
ーケニアのポスト・テスト・クラブで作成したタペストリーですね。
HIV/AIDS is an Attitude Problem.
We must Win the Battle of the Mind
Where It All Begins.　AMDA Kenya
と書いてあります。みなさん遠くて見えなかったと思います。易しい単語ばかりなので、意味は考えてみてくださいね。

■日本は学校の授業以外ではそんなにエイズの予防を呼びかけている気がしないけど、外国はどうなのか。
ーみなさんが感じられるように、まだまだ日本での予防活動は足りないと私も思います。外国でも、国、地域によってさまざまです。

■エイズが増えているのはなぜか？/なぜここ最近で急激にエイズ人口が増えたのか。
ー理由はひとつではありませんが、人々が地球規模で移動するようになってきたことが大きな要因として挙げられます。より多くの人がHIVに感染し、それを知らずにいる状態では、ますます多くの人が感染してしまう、というのは理解できるでしょう。

■AMDAは、いつ頃からHIVに対する取り組みがなされてきたのですか？
ー結構古いんです。もう10年以上前の1994年、ソマリア難民キャンプでの取り組みとタイでの取り組みが最初です。

■どうしてHIV医療支援活動をしようと思ったんですか？
ーAMDAは、途上国の保健医療、貧困などの問題に取り組んでいます。HIVは医療の問題でもあり、貧困をもたらす社会的な問題でもあります。もともとAMDAが活動していた国で、エイズが大きな問題になってきたので、HIV/エイズ対策の活動を行うようになったところがほとんどです。

■国外でHIV患者とかと接したり、活動していくなかで、どんなことを感じましたか？苦労はありますか？

ー特に現地で活動するAMDAのスタッフは、一緒に働く現地のスタッフや知人が日本では考えられないほど多くエイズで亡くなったりしますので、それだけでもとても厳しい環境にあると言えます。良ければ、AMDAジャーナルの2006年11月号、木下真絹子の記事、特に最後の部分を読んでみてください。

毎日新聞　2007.1.13

エイズ対策などを報告

ボランティア貯金支援受け　AMDAの海外活動

岡山

活動報告するAMDA関係者

国際医療援助団体「AMDA」（本部・岡山市櫛津）は12日、日本郵政公社の「国際ボランティア貯金」の支援を受けた海外活動などの報告会を市デジタルミュージアム（同市駅元町）で開いた。現地で事業を指揮するAMDA職員が映像を交えて説明し、約60人の参加者が熱心に耳を傾けた。

「国際ボランティア貯金」は日本郵政公社が91年1月から展開している事業で、加入者の郵便局の通常貯金や通常貯蓄貯金の受取利子の20～10％を開発途上地域の人々の福祉の向上のために活動する団体の支援に充てるもの。同制度は開始当初からAMDAを支援している。

今回AMDAは、同事業の支援を受けた中米ホンジュラスでのエイズ対策を紹介。性感染症患者への医薬品の配布や、学校の授業で若者と一緒に勉強会を開き、性感染症や避妊法の指導をするなどした現地での活動を報告。長期的支援の重要性も指摘した。

また、フィリピン・ルソン島南部アルバイ州での泥流災害や、インドネシア・スマトラ島の北スマトラ洪水への緊急医療支援活動も合わせて報告された。【植田憲尚】

国際協力と私－今私たちにできること－

AMDA高校生会　今谷　祐子

私がAMDA高校生会に入ろうと思ったきっかけは、2004年12月のスマトラ沖地震です。AMDAの医師や職員さんはいち早く現地に駆けつけ、医療支援の届きにくい地域や難民キャンプにおいて、被災者や難民を対象に救援活動を行っていました。AMDAの活動をテレビで見て私は「私にも困っている人のために何かできないのだろうか？高校生の私にも何かできることはあるのではないか？」と思ったのです。

私たちは、AMDAが海外で行っているプロジェクトの一つを選んで支援しています。

その中に2003年の2月～2006年7月まで、実施されたスリランカ医療和平プロジェクトがあります。これは、異なる民族同士による20年間の内戦が停戦し、和平のための支援活動として立ち上げたプロジェクトです。

このプロジェクトでAMDAは巡回診療、巡回健康教育、巡回X線撮影や、地元の保健医医療従事者による地域の公衆衛生の向上のための人材育成をしました。そしてAMDA高校生会もAMDAと共同で幼稚園と小学校にトイレを作る活動を行いました。なぜなら、トイレは誰にとっても必要不可欠なものであるにもかかわらず、長期間の内戦や貧困のため、多くの人がトイレのない生活を強いられており、トイレがないために寄生虫や感染症などが発生しやすいという現状があるからです。私たちは募金活動などを行って、トイレ建設のための費用を集め、スリランカの南部と北部の小学校と幼稚園に7つのトイレ建設を支援しました。また、みんなのトイレをできるだけ清潔な状態できれいに使ってもらいたいという思いから、私たちはトイレ掃除を呼びかける手作りポスターを作成しました。これからはトイレを使うことが当たり前な生活に変わり、病気から子供たちを守れるように役立てていってほしいと思っています。私は、私たちのスリランカの人々への気持ちがトイレやポスターを介して伝わり、それが将来を担った子供たちの生活環境を改善し、より健康に、笑顔で学校へ通える大きなプレゼントになったという現地からの報告を受けとても嬉しく思いました。

また、イベントや活動を通して他の国々の文化や問題点を勉強しています。たとえば、ミャンマーのお米を使って調理をすることでその国の文化や生活の特徴を実体験することができました。また夏にはJICA中国センターに見学に行き、青年海外協力隊が活動していたパプアニューギニアの方の体験談を聞いたりもしました。AMDA職員の方から「国際協力と私－いま高校生にできること」と題したワークショップをしていただきました。フリーマーケットでは、高校生会員が呼びかけて集めた文房具や日用品、衣類などAMDAブースを開いて販売しました。

私たちが、今一番力を入れているのはHIV/AIDSについての活動です。世界には約4000万人のHIV/AIDSと共に生きている人がいます。そしてその約3分の2がアフリカの人でした。また、毎日1万4000人が新たに感染していて、エイズで亡くなる人は10秒に1人ということになります。

今後、私たちはフリーマーケットや募金で集めたお金を発展途上国でHIV/AIDSに苦しむ人々のために送ろうという計画を立てています。お金は性別や宗教などの違いに関係なく現地の人が必要としているものを必要な分だけ購入できます。お金を送ることは物を送るだけでなく、送るお金をできるだけ現地の人のneedsに合わせて使ってほしいという、私たち高校生の気持ちを一緒に送るためです。　ほんの小さな活動でも、それによって世界の誰かの役に立つことができる最初の大切な第一歩になるのです。高校生なので、全員が集まることや時間が足りない、という問題点もありますが、メールを通してできるだけ高校生会員みんながAMDAの活動を知り、意見があれば出していく、という環境を作る努力をしています。また、AMDA職員の方のように私たち自身が現地に行けないというもどかしさがあります。ボランティア活動をするにあたり、今地球上で起こっているさまざまなことに耳を傾け関心をもつこと、国際協力に関わることが私たちのAMDA高校生会員としての役割です。そのために私は、誰かに言われて行動するのではなく、自分のできることを考え、意見を出し合い、困っている人たちの助けができるように努力を重ねていこうと思います。「bestよりbetterな活動をしよう」の考えに基づいて、これからも継続して高校生会活動に精進していきたいと思っています。

JICA中国国際センター 施設見学　2006.8.11

私たち高校生会は、真夏日の日差しの照りつける中、JICA中国国際センターへ施設見学に行きました。国際協力機構JICAは、日本から青年海外協力隊を派遣したり、外国から日本に来た方々に技術研修を行ったりしている施設です。

見学の内容としては、午前中は国際社会に関するクイズを交えた楽しいオリエンテーションを受けたり、JICA中国国際センター内の様々な部屋を見学させていただいたりしました。民族衣装や、特殊な楽器を展示しているブースもあり、私たちも民族衣装を着てみたり、異国の楽器に触れてみたりしました。なかなか触れる機会のない、国際貢献のために作られた施設ということもあって、様々な発見や印象に残る出来事がありました。

午前中の見学を終えた後は、昼食のエスニックバイキングをとりました。どの料理も非常においしかったのですが、料理の中にも国際的な要素が含まれていました。それは宗教的に豚肉や牛肉を食べられない人に配慮して、イスラムの作法とお祈りによって処理された肉料理に「ハラル」というマークをつける、というものでした。国際協力においては、食事という一つのシーンをとっても、多くのことを考えなければならないのだな、と考えさせられる場面でした。

午後は青年海外協力隊としてパプアニューギニアで活動されていた、細川さんのお話を聞かせていただきました。言語も、文化もまったく違う中で、生徒と協力して学校を運営した経験談は、非常に勉強になりました。「国際協力は、優しさの連鎖だ。」とう細川さんの言葉は、今も強く印象に残っています。

このように、JICA中国国際センターの一日の研修を通して、国際協力や、国際社会で生きていく、ということを改めて見つめなおせた気がします。

国際協力と私～今私たちにできること～

2006年4月14日と6月9日の2回に分けて、AMDA本部職員の田中さんから「高校生の私たちに今、何ができるだろう」ということについてワークショップをしていただきました。

＊高校生にできる国際協力とは？

	今すぐできるもの	時間がかかるもの
個人	● 省エネ、無駄を省く ● 募金を入れる ● 知る ● 学ぶ ● 考える	● 将来、国際協力の仕事に携わる
	広報関係	
高校生会	● 募金を集める ● ネットワーク作り(NGO) ● 高校間で理解を広げる	● 国際交流合宿

国際交流

ここから、大切なのは高校生である私たちでもできることがたくさんあり、また小さなことでも高校生だからできることや、やらなければいけないことがあるのだなと思いました。そのためにはまず学ぶこと！そして人とのふれあい、人と付き合うことで自分を知ることも重要であるということがわかりました。また、高校生会のメンバーをもっともっと増したいです。

AMDA高校生会　2006年度活動記録

4月　セミナー「国際協力と私ーいま高校生に出来ることー」（写真①）
5月　スリランカトイレプロジェクト　衛生啓発ポスター作り（写真②）
6月　セミナー「続・国際協力と私」
7月　ほっとハートイベント「途上国に学ぶHIV/エイズ」ワークショップに参加
RSKラジオに出演（8月26日放送）（写真③）
ミャンマー料理にチャレンジ「ミャンマー風カレーを作ろう」（写真④）
8月　JICA中国を施設見学（異文化体験教室）（写真⑤）
9月　街頭募金（RSK「守れ！地球のこどもたち」）（写真⑥）
AMDA受託のJICA地域保健研修にて来日中のザンビア研修生2名との交流会
高校生会リーダー紫安さんよりカンボジアスタディーツアーの報告（岡山県国際課）
11月　「青少年による地域社会作りフォーラム」に参加
（全国生涯学習フェスティバル実行委員会）岡山県生涯学習センター（写真⑦）
渋川青年の家まつり　フリーマーケット出展（写真⑧）
12月　3年生送別会
募金活動参加（RSKキャンペーン岸田敏志チャリティコンサート
「守れ！地球のこどもたち」）倉敷芸文館

「まなびピア岡山2007」プレフェスティバル　2006.11.3

青少年による地域社会づくりフォーラム

（岡山県生涯学習センター）

高校生会メンバー　発表者　杉山高志、竹久真也

今回パネルディスカッションとして「輝くまちへ私たちからの提案」と題し展開しました。私たちAMDA高校生会は、お互いに意見を出し合い、AMDA職員の方からも助言を頂きながら、スリランカトイレ建設支援プロジェクトの内容を織り交ぜ、パワーポイントソフトでプレゼンを作りました。“聴衆(audience)を意識すると良いよ”“プレゼンをする上での目的(objective)を明確にもったほうが良いよ”など大変有意義なご意見をAMDA職員の方からうかがいました。時には作業が夜の9時にまで及ぶことがあり、かなり力をいれて取り組みました。

パネルディスカッションでは、岡山県各地から高校生会を含む4つのボランティア団体が集まって熱い議論を交わしました。

では、パネルディスカッションの中で私たちが実際に行ったクイズです。

「ハンバーガーのビッグマック1個を買うのに必要な労働時間は、日本の首都・東京とケニアの首都・ナイロビではそれぞれ何分でしょう？」（答えは後に）このように、具体的な数値を知ることで、聴衆の方々は日本と世界との違いをはっきりと意識することができたようです。

『Bestよりbetterな活動をしよう』という基本理念に基づいて、ＡＭＤＡ高校生会はこれからも、グローバルな視点で活動していきたい…活動の原点に返り、新鮮な気持ちになった日でした。

（答え：東京10分・ナイロビ181分。）

AMDA高校生会新メンバー募集

AMDAのプロジェクトを支援し、国際協力事情を学ぶことを目的としたAMDA高校生会は1995年以来、活動を続けてきました。

新高校1、2年生のメンバーを募集しています！

活動は毎週金曜日の放課後、AMDA事務所にて行っています。お気軽に事務所を尋ねて下さい。

岡山市楢津310-1　電話086-284-7730（担当難波）
E-mail:kizuna@amda.or.jp
http://www.amda.or.jp/highschool/

AMDA高校生会2006年の活動から

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

AMDA Journal — 国際協力 — 2007年2月号
2007年2月1日発行（毎月1日発行）VOL.30 No.2　1995年11月27日　第三種郵便物認可　定価600円
発行／AMDA　〒701-1202　岡山市楢津310-1　TEL 086-284-7730　FAX 086-284-8959
AMDA ホームページ http://www.amda.or.jp/

スマトラ島北部緊急医療支援活動で協働するアチェの医師